現代中国語“把”構文における基本用法と派生用法とについて
ー連語論の観点からー

大東文化大学大学院博士前期課程
小路口　ゆみ

“把”構文は中国語文法の中で重要な文構造の一つである。その組立構造は「名詞$_1$＋“把”＋名詞$_2$＋動詞＋その他」であり、一般に“把”構文は「処置義」（例１、2）を表すと言われているが、「非処置義」（例 3、4、5）を表すこともある。

（1）他已经把菜都吃了。　（金立鑫:P17）
彼はすでにおかずを全部食べた。　筆者訳

（2）他拍拍脑门儿，嘿嘿笑起来，捶了赵涛一拳，把坐椅晃得吱吱响。《单》
彼はおでこをたたきながら笑い出し、趙涛をひとつこづいたので、坐っている椅子がきしんだ。　『鳳凰の眼』

（3）把东城西城都跑遍了。　（吕淑湘:P54）
東城と西城、すべて回りました。　筆者訳

（4）那么多的字把她写得头昏眼花。　（金立鑫:P17）
たくさんの漢字を書いたので、彼女の頭は朦朧となった。　筆者訳

（5）因为工龄不够，一上大学还把工资免了。　《插队的故事》
勤務年数が足らないので、大学に進学すると給料まで止められる。『大地』

上掲の“把”構文を見てみると、例（1）、（2）のように「処置義」を表す文が典型的な“把”構文であり、例（1）は意図的に“把”の客体を処置することを表す。“把”構文の基本義として使われる「意図的な処置のむすびつき」は“把”構文の基本用法である。例（2）は非意図的に“把”の客体を処置することを表す。“把”構文の派生義として使われる「非意図的な処置のむすびつき」である。また、例（3）、（4）、（5）も「非処置義」を表す“把”構文であり、意図的に“把”の客体の場所（範囲）で動作を起こしたり、非意図的に“把”の客体を変化させたり、あるいは結果をもたらしたりする。“把”構文の派生義として使われる「非意図的な処置のむすびつき」（例 2）と「動作の範囲・場所のむすびつき」（例 3）と「使役のむすびつき」（例 4）と「第三者の受身のむすびつき」（例 5）は“把”構文の派生用法である。本発表では“把”構文の基本用法及び派生用法について、連語論の観点からの分析を試みる。

日中対照言語学会月例会（12 月）
発表者：神野智久
タイトル：「着点への移動」と「起点からの移動」に見られる非対称性について
要旨：「起点」と「着点」の非対称性については、池上嘉彦 1981：121-170 において早くも議論に挙げられている。池上嘉彦 1981：126 では、「起点」と「着点」の非対称性について、次のように述べられている。

＜起点＞と＜到達点＞という概念は、＜変化＞の始めと終りという意味で論理的には完全に対等のものである。しかし、言語に現れている限りでは、人間の心理は圧倒的に＜起点＞より＜到達点＞の方に傾斜しているように思われる。＜到達点＞がどちらかと言えば＜無標識的＞なものとして扱われるのに対し、＜起点＞は＜有標識的＞な項としてふつう扱われるということに認められている。

池上による類型論からの指摘は非常に興味深く、多くの注目を集めた。そこで本発表は、現代中国語に見られる空間移動の非対称性について取り上げ、古川裕 2009、Langacker 2013 における考察を応用し、関連する問題の解決を図る。